

# 令和6年度 全国学力調査の結果より

## ○国語

国語は、東京都平均正答率より8ポイント程低くなっている。正答数分布グラフを見ると、全14問中の正答11問以上の児童が40%、6～9問の正答の児童が53%となっている。話すこと・聞くことの内容の正答率が極端に低かった（東京都より約20%低い）。観点別では、「思考・判断・表現」が10%低くなっている。

### 1 できているところとできていないところ

#### ①できているところ

- ・「人物像を具体的に想像することができるかどうかをみる」→正答率が87%にもなり、東京都の平均を14%上回った。
- ・「日常的に読書に親しみ、読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付くことができるかどうかをみる」→正答率が80%あり、東京都の平均を5%上回った。

#### ②できていないところ

- ・「目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を集め、伝えあう内容を検討することができるかどうかをみる」→正答率が40%であり、東京都の平均を27%下回った。
- ・「資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる」→正答率が33%であり、東京都の平均を23%下回った。

### 2 分析（課題）

読書タイムや読み聞かせなどの取組により、児童に読書の楽しさが浸透してきている。長期休業中を含む本の貸出量が増えていることから、学力調査でその効果が出たと思われる。

話し合いを含む協働的な学びを学習指導の中に多く取り入れて展開しており、楽しく授業が行われているが、結果的に成果が出なかった。目的や話題に応じた内容になっていない解答が多く見られた。自分の考えが話し合いの話題や発言の内容とどのように結び付いているか、つながりが分かるようにまとめることに課題がある。

### 3 課題改善のために

話し合いをやっていることに満足してしまっていなかったか。あまりに助け舟を出しすぎていなかったか。今後は、話し合いの時間を今まで以上に確保する必要がある。そして、話すこと・聞くことの改善には、話し合いの中で話題を意識しながら経過を捉えて話したり聞いたりすることや、話し合いの展開に応じて、互いの発言を結び付け、話し合った内容を踏まえて自分の考えをまとめられるように指導していかなければならない。

☆現在、校内研究を通じて児童の学習への意欲は高まっている。異年齢交流を取り入れた授業（YOSAAREタイム）を通して、学習意欲が向上し、教え合う場面が必然的に多くなっており、その成果が期待できる。今後、さらに基礎基本を丁寧に指導し、知識技能を身に付けさせ、主体的な学習によって学力向上を図っていく。

## ○算数

算数は、東京都平均正答率に比べ、14ポイント程低くなっている。正答数分布グラフを見ると、全16問中正答が4問以下の児童が、27%、10問以上正答の児童が67%となっている。大きく二極化してしまっている。「数と計算」の領域での正答率が53%に留まり、深刻に受け止めなければならない状況である（東京都の平均は70%）。「変化と関係」の領域でも正答数が40%という低い値になってしまった。（東京都の平均は57%）

### 1 できているところとできていないところ

#### ①できているところ

- ・「円グラフの特徴を理解し、割合を読み取ることができるかどうかをみる」→正答率が93%にもなり、東京都の平均を11%上回った。

#### ②できていないところ

- ・「数量の関係を□を用いた式に表すことができるかどうかをみる」→正答率が66%であり、東京都の平均は92%である。26%も低い。
- ・「問題場面の数量の関係を捉え、式に表すことができるかどうかをみる」→正答率が47%であり、東京都の平均を20%下回った。
- ・「性質を活用して、計算の仕方を考察し、求め方と答えを式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる」→正答率が40%であり、東京都の平均を21%下回った。
- ・「除数と商の大きさの関係について理解しているかどうかをみる」→正答率が53%であり、東京都の平均を20%下回った。
- ・「速さが一定であることを基に、道のりと時間の関係について考察できるかどうかをみる」→正答率が47%であり、東京都の平均より32%も低い。
- ・「折れ線グラフから必要な数値を読み取り、必要なデータを取り出して、分類整理することができるかどうかをみる」→正答率が27%と低く、東京都の平均を21%下回った。

### 2 分析（課題）

「数と計算」については、朝の大賀郷タイムや宿題などドリルを使って、強化してきたつもりであったが、結果として大きく東京の平均を下回った。二極化していることを理由にはできない。下位・中間層の底上げができていなかった。また、「速さ」の意味について理解できていないことがわかった。さらに、「折れ線グラフ」から必要なデータを読み取り、条件に当てはまることを記述することも大きな課題となった。反面、円グラフの読み取りの問題が、15人中14人正解することができた。

### 3 課題改善のために

「数と計算」については、下位層を中心に関心・意欲を高め、問題の選別、定着のための取組、アプリを使った取組など子供たち一人一人にあった学び方を指導しなければならない。「速さ」に関しては、日常生活に照らし合わせて、飛行機・自動車・自転車・徒歩の例から求めた速さの単位量当たりの大きさの妥当性を判断するなど指導の工夫をすることが大切である。「折れ線グラフ」については、データを読みとって捉えたことを伝えあう活動を行う。その際、身近な場面から興味や気付きから生じた疑問を解決できるような問題場面を設定することが大切である。